

睡蓮

S U I R E N

愛知大学
教育研究支援財団
広報誌

10

2023 / 4



巻頭特集 [知の対話]

SDGsを自分事化するために。

一般社団法人
中部SDGs推進センター代表理事

戸成 司朗

愛知県
政策企画局長

沼澤 弘平

Professional Eye

いつの時代も、面白いアイデアは
「遊び心」から生まれる。

～江戸時代から続く「からくり人形」の世界から～

からくり人形師 九代目 玉屋庄兵衛



知で活きる人へ。

公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

Contents

〔知の対話〕

SDGsを自分事化するために。

P.03

〔Professional Eye〕

いつの時代も、面白いアイデアは
「遊び心」から生まれる。

～江戸時代から続く「からくり人形」の世界から～

からくり人形師

九代目 玉屋庄兵衛

P.08

〔AERSの一年〕

【教育活動の支援】

「東亜同文書院史の源流を支えた金沢」等

P.11

「奨励賞・奨学金授与式」等

P.14

同窓会会長・後援会会長ごあいさつ

P.18

【寄附金名簿】

P.19

「睡蓮」について （題字「睡蓮」平松 礼二氏 筆）

愛知大学の教育思想は、国際社会や地域社会のリーダーとなり、世界をダイナミックに動かす人材を育てること。睡蓮の花言葉には、そのような人材に必要な「清純な心」「純粋」「優しさ」「信頼」の意味が含まれており、彼らの未来を支える愛知大学教育研究支援財団の情報発信誌を「睡蓮」と名付けました。

表紙のご紹介

平松 礼二氏 作
「ジヴェルニー モネの池・夏」部分(2003年)

モネが後半生を過ごしたフランスノルマンディー地方ジヴェルニーにある「モネの池」。モネが愛した睡蓮の花が咲く池は、夏に彩られ、どこまでも青く淡い佇まいを見せられている。睡蓮の池を日本風の橋が横切っているが、ふと見ると、そこにモネが立って池の睡蓮の花を眺めているような錯覚に陥ってしまう。



ごあいさつ

日頃、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」の活動に、多大なるご理解、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

戦前、中国・上海において、アジアで活躍する国際人を養成し、特に日中関係に貢献する人材の育成を目的に、海外に設けられた日本の高等教育機関であり、最も古い歴史をもつ名門・東亜同文書院大学。敗戦による閉校後、最後の学長であった本間喜一氏らが、「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する国際的教養と視野を持つ人材の育成」を建学の精神とし、新設した大学が「愛知大学」であることから、東亜同文書院は愛知大学の祖といえるでしょう。愛知大学が開学から77年間で15万余の、そして今もグローバルな社会に毎年、優秀な人材を輩出し続けていることは、この精神が脈々と継承されている証でもあります。また、2011年には社会に求められるより優秀な人材を育成するキャリア形成支援、学生の自立心を高め、積極的なチャレンジを促す課題解決型の正課外プログラム(ラーニングプラス)や海外フィールドスタディなどを拡充するため、名古屋駅前に新キャンパスを開設。東亜同文書院の理念実現のため、日々、愛知大学は進化し続けています。

しかし、時代は猛威を振るったコロナパンデミックをはじめ、世界を取り巻く情勢の変化や猛スピードで開発されるAIなどの先端技術により、大きな変革の只中にあり、大学と学生を取り巻く環境もめまぐるしく変化し続けています。このような不透明な時代に、愛知大学及び愛知大学生の教育研究活動への支援を行うため、2012年11月公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」が設立されました。

本財団が学術研究助成、課外活動支援、奨学金制度、キャリア形成支援をはじめとする諸事業を積極的に推進することができましたのも、この趣旨にご理解とご賛同をいただいております大学、後援会、同窓会をはじめ、広く一般企業、個人の方々のご厚情の賜物でございます。そこで、賛助会員様をはじめとする皆様に当財団の事業内容をご報告し、成果を共有いただきたく、「睡蓮第10号」を送らせていただきます。ぜひ、ご高覧いただき、これからも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人
愛知大学教育研究支援財団
理事長



加藤 満憲

評議員・理事名簿(2023年4月現在)

評議員	地主 道夫	理事	加藤 満憲(理事長)
	近藤 薫		林 昇平(常務理事)
	石川 健次		長谷川 信義
	西原 健二		古川 為之
	土井 義昭		那須 真理子
	岸田 充広		柘植 繁久
	杉本 みさ紀		八木 好郎
	金田 学		武山 卓史
	坂野 嘉昭		平井 治彦
	佐々木 康司		唐 啓山
	砂山 幸雄		中尾 浩
	吉垣 実		近藤 智彦
監事	古川 千歳		功刀 由紀子
			小出 恭己
			南 成



巻頭特集

知の 対話

愛知県
政策企画局長

沼澤 弘平
NUMASAWA Kohei

一般社団法人中部SDGs推進センター
代表理事

戸成 司朗
TONARI Shiro

SDGsを自分事化するために。

社会を変える大きな流れとして広く認知されてきた「SDGs」。一方、それを自分事化して具体的に実践している企業や個人は、まだそう多くありません。そこで、愛知県でSDGsを企業経営に反映させるために様々な取り組みをしている一般社団法人中部SDGs推進センター代表理事の戸成氏と、県のSDGs政策を統括する愛知県政策企画局長の沼澤氏にお話を伺いました。SDGsの本質に対する理解を深めながら、私たちが今どう行動していくことが望ましいのか、具体的な例とともにお伝えします。

県民の中で急速に高まる SDGsへの認知と理解

ー まずは簡単な自己紹介や現在の取り組みを教えてください。

戸成／セゾングループの西友に35年勤める中で、代表の堤清二の元、企業はどうあるべきかや、消費者と社会のあるべき関係性について考えながら仕事をしてきました。同社を辞めてからは、それまでの知見や経験を社会に還元したく、住友理工のCSR部門をゼロから立ち上げたほか、中部地域で社会課題を解決したいと考える人を支援するNPO法人を設立するなどしました。さらに2019年、SDGsを推進する法人を仲間と共同で設立し、当時中部圏ではまだ低かったSDGsへの意識を高める啓発活動を始めました。今では、企業の経営戦略の中にSDGsを組み込むコンサルティング事業や、持続可能な経営を実現する人材を育てる「SDGs経営塾」の運営も行い、SDGsを企業にインストールするお手伝い全般をしています。

沼澤／私は現職に2021年に就任しました。愛知県は、2019年に内閣府から「SDGs未来都市」に選定されたことを受け、知事を本部長とする「SDGs推進本部」を設置し、「SDGs未来都市計画」を策定。組織全体で本格的にSDGsに取り組んでいます。最初の第1期計画では、SDGsを県民の方々に知っていただくために啓発事業に

力を入れてきました。2021年7月に実施した県政世論調査では、SDGsという言葉を知ったことがあるだけでなく、「聞いたことがあり、内容も知っている」と答えた方が、2年前の7.7%から42.2%に大幅に上昇するなど、この数年で県民の皆様のSDGsに対する理解度が急速に進んでいると感じています。

ー 改めて、SDGsって何を指しているのでしょうか？

沼澤／SDGsが目指すものは、「2030年のあるべき世界の姿」です。元々は国際的な採択で決まった話で、発展途上国から先進国まですべての社会を包括するようなスケールの大きな概念なので、身近に感じづらい方もいらっしゃるかもしれません。しかし、我々にできることも多くあります。例えば、ゴール16の「平和と公正をすべての人に」の紛争やテロの防止などは、私たちの生活とはかけ離れたイメージを持たれるかもしれませんが、ゴール16には、差別の根絶、政治参加なども含まれており、会社でのハラスメントをなくすための対策や、投票率を上げて住民の政治参加を促すことなどがSDGs達成に向けた取り組みとなります。ゴール9の「産業と技術革新の基盤をつくろう」も技術者だけの話ではなく、持続可能な社会を創る先端技術に対して子どもや若者に興味を持ってもらうために、体験イベントやロボットコンテストなどに連れていくことだってSDGs

です。また、MaaS*や高性能蓄電池といった環境配慮型のテクノロジーを活用したモノやサービスを利用し、関連企業等を応援することも個人でできるSDGsの取り組みと言えます。

戸成／私は企業の方に、SDGsとは、これまでと同様の企業活動を続けていては地球が減ってしまうという危機感を前提に、2030年までに自社がどう構造を変えるべきかを示す「企業の羅針盤」だとお話しています。要は世の中の市民の価値観が変わってきているのです。特にミレニウム世代の市民意識の変化は顕著でして、企業の最大の顧客は市民ですから、市民の意識の変化に合わせて企業も変わらないと生き残れないのです。

市民=消費者の意識の高まりで、 企業の選別・淘汰が進んでゆく。

ー 市民の力が大きくなっていると。

戸成／私は、SDGsは、市民による企業に対する「選挙」だとお話しています。どの企業を選ぶのか。このことが、社会を変える最大の影響力として発揮されるでしょう。エネルギーの使いすぎや食品ロスをなくす努力も非常に重要なことですが、市民による最大のSDGsは「企業を選別する」ことだと、皆さんにはぜひお伝えしたいですね。企業も、市民から選ばれないと、自分自身が持続可能でなくなるということを肝に銘じなければなりません。

ー ビジネスの現場で、SDGsは今どのように取り組まれていますか？

沼澤／大企業は非常に意識が高く、自社の事業との関わりを考えながら目標を立てて取り組まれている会社が多いと思います。一方、中小企業の中には、SDGs宣言をしたものの何から取り組みばよいか分からないという声も聞かれます。最近では、サプライチェーンの取引先企業に対して、SDGsに取り組んでいることを取引条件にするなど、急速にビジネス環境が変わってきていますので、中小企業にとってもSDGsへの取り組みは急務です。愛知県としても、SDGsの達成に向けて取り組む企業・団体等を登録し、企業等の取り組みを「見える化」することで、具体的な行動を促すことを目的とした「愛知県SDGs登録制度(以下「登録制度」)」を運用

一般社団法人中部SDGs推進センター代表理事 戸成 司朗氏

1948年、長野県生まれ。35年間セゾングループ(株)西友に勤務、07年執行役員副社長を最後に退任。自宅の在る日進市に戻り、住友理工(株)のCSR部長、アドバイザーを務め、価値創造型CSRを推進してきた。また、2013年にはNPO法人中部プロボノセンターを設立し、中部圏のビジネスマンが社会課題の解決に参加する取組みを支援してきた。2019年一般社団法人中部SDGs推進センターを設立、代表理事に就任しSDGsの普及啓発、実践指導に取り組む。

中部圏SDGs広域プラットフォーム副会長／SDGs AICHI EXPO実行委員会副会長



しています。2023年2月1日現在、1,068の企業等に登録いただき、毎月約60件のペースの登録の申請があることから、SDGsの取り組みの広がりを感じています。登録制度に登録するメリットとしては、SDGsに取り組んでいることを取引先や金融機関など様々な利害関係者にお伝えすることができることです。また、SDGs達成に向けた取り組みを行う企業同士のマッチングと新たな取り組みの創出を図るため、登録企業等向けの交流会も開催しています。今年度の交流会ではSDGsを起点とした事業展開についての講演や、地域課題を解決するビジネスアイデアを出し合うワークショップを行いました。



愛知県SDGs登録企業等交流会

ビジネスの本業を 持続可能なものに転換する。 それが、SDGsの本質。

戸成／SDGsに対する市民の意識の高まりとともに、SDGsに関わろうとする企業が増えているのは大変良いことだと思います。一方でSDGsウォッシュと呼ばれる、SDGsもどきのような活動で止まっている企業もあり、注意が必要だと思います。もう既に自社でやっていることを、SDGsの17のゴールと絡めてマッピング整理してPRすることがSDGsの本質ではありません。それはSDGsを始めるきっかけとしては良いと思いますが、SDGsの本質は、ビジネスモデルのアップデートにあります。本業を20世紀型の事業から脱却し、地球も人間も持続可能な21世紀型のビジネスに変えなければなりません。つまり、経営戦略の根底から変えなければならないのです。

沼澤／戸成さんがおっしゃるとおり、企業が既に行っていた地域の清掃活動や、照明をLEDに変えたことなどをもってSDGsに取り組んでいるとされている企業さんもあり、必ずしも自社の本業を見つめ



愛知県 政策企画局長 沼澤 弘平氏

東京大学法学部卒業後、2003年に総務省入省。米国コーネル大学法科大学院にて修士号を取得。米国コロンビア大学大学院客員研究員、群馬県庁で介護高齢課長、労働政策課長、財政課長等を経て、総務省で地方税制を担当。2021年から現職。愛知県のSDGs政策全般ほか、県の重要政策の企画立案などに取り組む。

直すまでには至っていないと思います。ですから、身近にできる社会貢献をきっかけにスタートし、次はビジネスの本業の中でSDGsを進めていただけるよう我々もサポートしたいと思います。

また、先ほどのお話にもありましたが、企業の行動を変える上で消費者の意識は大きな力になると思います。県民の方の意識も非常に高まっていますので、消費者が賢い消費選択ができるようサポートし、企業の行動変容につなげていきたいと思っています。愛知県ではSDGsをわかりやすく学べるパンフレットを作成しているほか、県民の皆様からお声がけいただければ出張講座という形で講演をさせていただいたりもしています。実際、子どもや親御さんの関心も大変高まっていると思います。親よりも子どもの意識の方が高く、親御さんがSDGs的でないことをすると、子どもが「お父さんそれダメだよ」と言って、親御さんが意識のギャップに気づく、なんていう話を聞いたりもします。



高校でのSDGs授業風景

ビジネスモデルは陳腐化する。 企業が生き残るには 未来を先取りするしかない。

ー 現状維持でも売上が得られていると、企業のあり方を変えるのにも抵抗がありそうです。

戸成／とはいえ、ビジネスモデルは陳腐化するのはです。それが、3年後か5年後か7年後かはわかりません。でもいずれ通用しなくなります。過去、いろんな企業が変遷を遂げてきました。なぜコダックが倒産し、富士フイルムが生き残ったかというのは大きな一例です。世界で初めてデジタルカメラを発明したのは、実はコダックでした。決してフィルムカメラに固執したわけではありません。ですが、スマホが登場しデジタルカメラの市場が急速に縮小するという予想ができなかった。富士フイルムは、カメラという市場が消えるだろうという予測の元、事業自体を大きく変えていきました。また、ヨーロッパで当時世界最大の携帯電話メーカーだったノキアも、iPhoneの登場で大きく事業を変え、今や基地局を提供する世界有数の通信インフラ会社に変換しました。うちの業界は大丈夫という方もいらっしゃるかもしれませんが、ウミガメの鼻にストローがささった動画が流れた瞬間、プラスチックストローは「悪」になりました。それがSDGsの怖さです。海洋プラスチック汚染の主犯は、プラスチックストローでしょうか？そうではありません。しかし、ある日急に企業が糾弾されることがあるのです。

社会の構造が根本的に変わることをいち早く見抜き、事業を大きく転換することで、売上を劇的に飛躍させることもできます。自動車がガソリン車からEVに変わる中で、電池が必要になる。だから、電池やモーターの性能を評価する測定器が必要になると見抜き、新しい測定器を開発して、株価がとんでもないことになった企業もあります。その陰で、急速に消えていった企業も沢山あります。今、日本企業に問われているのは、同じネジを作る会社でも、新しい社会で生き残る製品のネジを作るのか、社会で淘汰される古い時代の製品のネジを作るのかということです。どちらが生き残るかは明白です。うちの会社は安泰だなんて、とても思えないのではないのでしょうか。

ー SDGsを経営に落とし込む上で、中部圏でうまくいった事例などありますか？

戸成／トヨタ紡織さんの統合報告書の作成を監修する機会をいただいたことがあります。社長が、これからのトヨタ紡織の役割を「インテリアスペースクリエイター」と定義づけられていたのですが、社長とその中身について徹底的にお話しさせていただきました。社長は、モビリティの空間が大きく変わると予測されていたのです。車内で音楽を楽しみ、映画を鑑賞するような時代が到来すると。その新時代のクリエイターに、トヨタ紡織はなるのだと。そのお話をメインテーマに価値創造ストーリーを作り、統合報告書の冒頭から最後まで一つの物語として作成しました。すると、社員の方も自分たちが何をすべきかが具体的にわかるようになり、GPIF(年金積立金管理運用独立行政法人)の優秀統合報告書にも選ばれました。ストーリーにすることで、社員や取引先、消費者らに対して、自社の価値を具体的にお伝えすることができるのです。SDGs経営を実践する上で、自社が目指す方向性がいかに新しい社会の価値観とマッチしているかを、みんなの腹に落ちるように伝えることは、極めて重要です。またDX(デジタルトランスフォーメーション)の活用も大切です。ある会社は、SDGsに取り組むために新体制を整えましたが、従来の意思決定システムのままでは稟議書を通すのに10日もかかってしまうと。そこで電子稟議を併せて導入して、決裁が3時間で通るようになりました。デジタル技術を導入してSDGsを推進する

小さな一例です。

さらに、岐阜県産の木材で家を建てたり、業者さんに木材を販売する会社をお手伝いしたこともありました。自社のSDGsは何かを深く議論し、国産材で持続可能な社会を作ることだと決まりました。突き詰めて議論したことで、林業の現場で作業されている方達とこれまで接点を持っていなかったことに思い至り、森林まで行って林業業者の方と話をしながらサプライチェーンを丁寧に作り上げるようにしました。そして今、ウッドショックで輸入材が入ってこなくなり、いろんな住宅メーカーが急に国産材を欲するようになりましたが、岐阜県産の材木を大事に育ててきたこの会社には注文が殺到しています。自分たちのSDGsは間違っていなかったと、改めて感じていらっしゃると思います。

まずはみんなで考える場を設けることから。

ー SDGsを本格的に導入するには、社をあげて取り組むことが必要なのですね。

戸成／場作りはとても大切です。愛知県さんも先日、SDGsに取り組むNPOが企業とマッチングできるよう、プレゼンの機会を提供するイベントを実施されましたね。

沼澤／世の中は、行政が掛け声をかけただけで変わるものではありません。みんな一人ひとり、根本の部分では個人として生きていますので、一人ひとりが理解して納得しなければ前に進めません。ですから、事例を共有する、マッチングを促す、社会課題の解決を志す方に場を提供するなど、新しいつながりを作ることでSDGsを前進させていきたいと考えています。皆さんに知ってもらうこと、場を提供すること。みんながSDGsに向かって動きやすいように支えていくのが、行政の役割だと思っています。

ー 先ほどのお話にも出てきましたが、愛知県ではSDGsを学べるパンフレットも作っていらっしゃいますね。

沼澤／愛知県では今年度、県民一人ひとりの具体的な行動を促進するための、「私にもできるSDGs」という取り組み紹介パンフレットを作成しました。一人でも多くの方に取り組んでいただけるよう、

ハードルの低いものを中心に掲載するとともに、取り組みが求められる背景や効果、取り組みを実践している方のインタビューも掲載しています。また2021年度には、愛知県の大学生とともに、SDGs時代のビジネスモデルを紹介する企業事例集を作成しました。自社の本業の中でどのような取り組みができるかを、考えるきっかけにいただけたらと思います。

判断軸は「損得」でいい。 ただし保身ではなく、 社会と未来のために。

ー 元々日本人は、資源を大切に節約が得意なはずですよね。

戸成／そう。私はSDGsと日本人は、親和性があると考えています。日本人は自然を畏れ敬います。ご神体が、木や山など自然の一部ですね。また、市民がお互い助け合う共助社会を日本人は昔から築き上げてきました。さらに、日本には「道」を極めるという思想がありますが、要は人間としてのあり方を極めていくことです。日本人の「もったいない」という感覚もまさにSDGsです。我々がこの何十年間か目先の利益を追い求めすぎただけで、元々日本人は自然を畏れ敬い、助け合い、あるべき姿に向かって道を極めることに長けていました。それは、SDGsそのものですね。

時々、「自分はそんなできた人間ではないから」とおっしゃる方もいらっしゃいますが、私は「経営者の皆さんは損か得かで決めてくださって結構です。」とお話します。しかし、それが「自分にとっての損得」なのか、「社会にとっての損得」なのかで全然違います。前者は単なる保身ですが、後者は全体のためです。もう一つ、「今の損得」「10年後の損得」「20年後の損得」という時間軸で判断することです。日本人には昔から「損して得とれ」という言葉があります。今得に見えても5年後信用を失い、大きな損を被るかもしれない。データの改ざんなどの不祥事の大半は、「今損か得か」で判断しているからですよね。企業には損得で判断していただいて結構ですが、それを「今の損得」や「自分にとっての損得」で判断しないでほしいと伝えています。でないと、後々大変なことになると思います。

愛知県も 着実に変化しているが、 次の段階へレベルアップを。

— 愛知県で変化の兆しは現れていますか？

沼澤／先述のとおり、SDGsへの理解は非常に高まっています。愛知県で2020年度から開催している「SDGs AICHI EXPO」は今年で3回目。119の企業・団体等にご出展いただくとともに、3日間で延べ16000人以上の方にご参加いただきました。カーボンニュートラルも、中部圏ではずっと「低炭素」社会と表現してきましたが、去年いよいよ「脱炭素」と言い切るようになり、大きな転換点を迎えました。みんなの考え方が大きく変わってきていると肌で感じます。その上で先ほどのお話にあったように、企業であれば単に社会貢献だけでなく、自社の本業との関わりの中でSDGsを実践していただくことも大事です。県民の皆様にも知っていただくだけでなく、自分たちに何が具体的にできるかを考え実践していただけるよう、普及啓発の材料などを提供していきたいと思っています。

戸成／2019年からみると非常に関心が高まっていると思います。だからこそ、SDGsを知り理解する段階から、SDGsを本質的に実践する段階にステップアップしたいところです。SDGsで重要なことは、次の社会を創造することです。新しい挑戦ができる「心理的安全性」が確保された職場が必要不可欠なのです。しかし、愛知県の会社の中には、効率優先主義で改善には強いのですが、全く新しいことを始める際には否定的になるケースも目立ちます。経営者の方は「今の若者は指示待ち人間だ」とか「言われたことしかない」などとおっしゃいますが、会社が常に指示ありきで動いている様子や、指示以外のことをしても歓迎されない雰囲気が少なからずあるのではと感じます。中途採用の社員が新しいことを提案しても、「うちの会社ではそんなことは通用しない」と言われる例を愛知県ではよく聞きます。リーダーが変化を恐れてはいけません。変化を恐れては、SDGsは達成できず、やがて市民からも選ばれない企業になり、気づいた時には大変なことになってしまうと、最後にお伝えしたいと思います。



SDGs AICHI EXPO

地球1個分の資源で 暮らしていけるように。

沼澤／日本人はSDGsと親和性があるというお話もありましたが、一方で世界中が日本人と同じ生活をする地球2.8個分の資源が必要という現実があります。私たちが普通だと思っている暮らしを世界中で行うことはできません。そういう暮らしは持続可能ではないのです。SDGs達成に

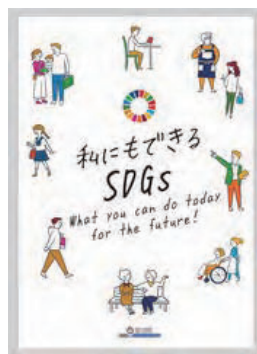
向けて私たちの生活の中で達成できることは沢山ありますから、みんなが地球1個分の資源で安全安心に暮らしていけるように、身の回りのできることを1個でも2個でも始めていただけたらと思います。一方、企業の方には、県民の意識が変わっていることを伝えることが大事だと思います。企業は経済活動の中核を担い、自社の商品やサービスを社会に提供し、それを通じて社会課題の解決につなげていくことが期待されています。今でも様々な社会貢献に取り組んでいただいていると思いますが、自社の本業で課題解決につなげていただけたらと思います。SDGsという共通言語のもと、県民の皆様、企業、自治体などがパートナーシップを発揮することで、簡単には実現できない未来へと近づいていくことができます。ぜひ、SDGs達成に向けて皆さんと共に取り組みを進めていきたいと思っています。

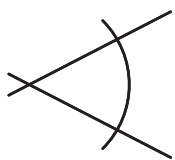


Column 今できることから始めよう!

愛知県では「私にもできるSDGs」というパンフレットを作成し、SDGsの17のゴールについて、私たちが身近に実践できる取り組みの事例を紹介しています。説明だけでなく、実際に取り組んでいる方のインタビューも掲載しているので、読みやすさや親しみやすさを感じられると思います。パンフレットは、下記二次元コード遷移先の県のホームページからPDFでダウンロードしていただくことが可能です。ご興味のある方はぜひご覧ください。

PDFのダウンロードはこちらから





Professional Eye



いつの時代も、面白いアイデアは 「遊び心」から生まれる。

～江戸時代から続く「からくり人形」の世界から～

featuring

からくり人形師

九代目玉屋庄兵衛

たまや しょうべい

本名・高科庄次。1954年、愛知県春日井市生まれ。25歳で父の七代目玉屋庄兵衛に弟子入りし、1995年に九代目玉屋庄兵衛を襲名。江戸時代に田中久重が製作した、弓矢を放つからくり人形「弓曳童子」を完全復元したほか、湯飲みを運ぶ「茶運人形」を製作して大英博物館に寄贈するなど、からくり人形の作り手であると同時に日本文化の伝え手としても活躍する。国や県などから「現代の名工」「愛知の名工」など表彰多数。

今も昔も人々の心を掴む、
伝統的からくり人形

かわいい人形が、お茶の入った湯飲みを運んで去っていく。侍の姿をした人形が、矢を一本ずつ狙いすまし、的に当て、少し得意げに笑みをこぼす。正座した人形が小さな半紙に筆を走らせ、複雑な漢字を綺麗に書く。これ全部、電力ではなく、木や糸などの天然素材のゼンマイやバネなどの仕掛けだけで動く。知ったら、また江戸時代に作られたと知ったら、驚く人も多いので

はないだろうか。九代目玉屋庄兵衛氏は、尾張名古屋に拠点を置く、江戸時代から続くからくり人形師。日々からくり人形の修理復元、創作を手掛け、現在も面白い人形を作り続ける。

「からくり人形の魅力はなんといっても、人形が勝手に動いているように見える『不思議さ』にあります。鉄やプラスチックは一切使っていないのに、どうしてこんな面白い動きができるのだろう?と」。

その不思議な仕掛けは、江戸時代、町のお祭りで使われた山車からくり人形を、「もっと面白いものにできないか」と町同士が競い合う中で発展していったという。

「例えば犬山には13町内に13の山車がありました。あちらの町

が、逆立ちして鐘を叩く人形を作れば、こちらの町は鉄棒を押してぐるぐる回る人形を作る。町の豪商たちが、『他の町を超える人形を作ってくれ』と人形師に頼むのです」。

町同士の切磋琢磨でどんどん技やアイデアが磨かれていったからくり人形は、冒頭のような高度な仕掛けを持つおもちゃとして、お殿様にまで進呈されるようになった。

「今のトヨタや、日産などの企業と同じです。いいロボットができたらもっと良くしようと、作り手は競うように発展させる。絶えず進化させ続けるというマインドが、技術革新や新しいものの創造へとつながるのです」。



「もっといいものを作ろう」 その気持ちはどこから生まれるのか。

今、時代が急速に変化し、過去の成功に囚われない新しい商品やサービスを作ることが求められている。創造性を養い発揮するにはどうすれば良いか、悩む現代人も多いだろう。

人生の多くを創作に費やしてきた九代目は、「飽きずに続けられる、自分の好きなことをヒントに考えては」と話す。父親が七代目で、子どもの頃から人形が手の届くところにあった九代目にとって、自分の手でおもちゃを作るのは当然のことだった。

「木を削って船を作り、池に浮かべては転覆しないようにと試行錯誤を繰り返していました。遊びの中で、今のからくりに通じるようなことを学んでいたのだと思います」。

好きなことなら、新しいアイデアを考え続けるのも苦にならない。その延長上、仕事なのか趣味なのか遊びなのかわからないところから、アイデアは生まれる。考え続けているのに、負担や違和感を感じない領域こそ、自分が創造性を発揮できる場所なのだ。

茶運人形



創造性を阻む 現代人の思考の罫

一方、次のような考え方は、人の創造性を潰してしまうという。

「これでは生活をしていけないとか、趣味レベルならやらない方がいいとか、そういう思考が一番いけない。効率性や生産性にばかり目が行ってしまうと、創造性を潰してしまうことになります」。

今、一部の小学校では「危ないから」と子どもたちに彫刻刀を使わず、版画製作もさせないような場面が増えているという。また、ハサミを使わせない幼稚園も増えてきているという。面倒なことを事前に回避する思考が、新しい可能性の芽を摘んでしまう。

「私たち名古屋人は、もともと遊びを大事にしてきたはずです」。

江戸時代に、八代將軍吉宗が財政規律を重視し芸事を規制した時も、尾張藩主七代目の宗春は、自由放任主義で経済を活性化させる政策をとり、人形師や芸人など、ものづくりの職人を守った。宗春は失脚させられたが、その後名古屋がものづくりで栄えた背景に、創作の自由を求めて全国から集まった職人たちの存在があったことは間違いない。山車からくりが発展した陰に、豪商たちの「お金は出すからもっと面白いものを」という粋な心や遊び心があったことも忘れてはいけない。

弓曳童子



自由な創作を可能にする 「木」に対する想い。

多くの山車からくりを修理復元してきた九代目が、今最も深刻に感じている課題が、良質な国産木材の不足だ。良い木は美しく育つのに何百年。その後何十年も寝かせて、曲がらない良質な木材となる。気の遠くなるような年月がかかるので、現在は国内の生産数が激減している。

「からくり人形の骨組みは、全て木製です。また木は、彫刻刀ややすりで簡単に形を変えることができます。人形の顔の繊細な表情は、木の自由さがあってこそ。素材として非常に優れているのです」。

少し下を向くと悲しそう。だけど上を向くと笑っているように見える。そんな微細な表情の変化を、私たちは木の温もりの中に感じているのだろう。

「日本人はこれからもずっと、木に対する想いや愛着を持ち続けると思います」。

九代目の目には、己の自由な創作を可能にしてくれる木への畏敬の念と愛情が込められていた。



Topic

～からくり人形の歴史～

戦国時代が終わり、民衆文化が発展し始めた江戸時代初期。からくり師である竹田近江が「竹田からくり芝居」を旗揚げし、京都・尾張・江戸をはじめ全国に巡業して舞台からくりの面白さを広めた。その後、からくり人形は、関西では人形浄瑠璃として、尾張では山車からくりとして発展した。しかし1730年、八代将軍吉宗の享保の改革で質素倹約が奨励されると、華美な芝居が禁止され、京都や大阪の人形職人や芸人は行き場を失い、芸事を大切にする尾張に流れた。その時、京都から尾張の旧玉屋町（現在の名古屋市中区錦三丁目周辺）に移住したのが、からくり人形師の初代玉屋庄兵衛である。名古屋祭の山車からくりの製作をはじめ、歴代の玉屋庄兵衛は各地のからくり人形の技術継承を下支えしてきた。



AERSの一年

(アース)

明日の地域社会に貢献する人材を育成する

愛知大学教育研究支援財団(愛称^{アース}AERS)の一年を振り返りました。

「^{アース}AERSとは:AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION(愛知大学教育研究支援財団)の頭文字を合わせた愛称です。^{アース}AERSは、より良い明日(アース)に向かおうという思いも込められています。」



教育活動の支援

東亜同文書院史の原流を支えた金沢

愛知大学名誉教授(地理学)

愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、毎年同センターの全国での啓蒙活動のための展示・講演会を各地のかかわりのある都市で開催し、ほぼ20都市をめぐるしてきた。そしてコロナ禍でここ2年は開催できなかったが、予定通り昨年9月23～25日に金沢市の金沢城公園に隣接する県政記念館の木迎賓館で開催することができた。

展示品は、東亜同文書院史を物語る歴史的絶品の数々を緑が映える回廊沿いに配置し、閲覧者の目を引き付けた(写真A)。

一方、講演は金沢開催にちなみ、筆者は「書院史の源流を支えた金沢」というテーマで、画像スライド方式でお話した(写真B、C)。

内容は、東亜同文書院の前身となる「日清貿易研究所」と「南京同文書院」の清国での開設時に金沢の有志がその開設をバックアップしてくれたというストーリーである。東亜同文書院を開設する動きは2つのエネルギーの融合で始まった。一つは、天皇家の側近中の側近で、ドイツ留学で博士号の学位をとっていた近衛篤磨が二度目の世界旅行の帰途に、清国を訪問し、清国が列強に侵略される根底には教育が不十分だからだと、清国の政治的リーダーであった劉坤一や張之洞へ訪問対談し、日清間で両国の学生を育てようという合意が得られ、さっそく清国の都である南京に南京同文書院を作り、日清両国から優秀な学生たちを集め、入学させたなごれである。清国の学生たちは日本が日清戦争に勝利した日本の急激な近代化を学びたく、この学校に入学した。しかし、同時に山東半島に起こった外人排斥を目的とした義和団の乱が勢いを増し、南京へも向かうという恐れが出て、南京同文書院はその難を逃れるため、租界のある上海へ移転した。そこでは、もう一つの流れである日清間の貿易こそが日清間の経済発展を進められ、両国の発展が可能になるとして、両国学生に貿易ビジネス教育を目指そうとしていた荒尾精による学校構想があり、そこでそれらを統合して、この上海に、1901年、荒尾構想の「東亜同文書院」が誕生することになった。

さて、問題は金沢との関係である。この東亜同文書院を立ち上げた荒尾精(愛知県出身)の構想で、彼は日清間の貿易を活発化するために、この新たな「日清貿易研究所」で日清間の貿易ビジネスマン育成を目指すために、全国の主な都市で学生募集を行った。金沢の演説会も予想以上に盛況で、参加していた一人が、市内近江町の魚屋である野村喜一郎で、荒尾構想に納得し、県議会に談判し、学生を県費で清国へ送ることを実現させた。また折から、幕末に上海を訪問し、帰国後、石川県の工業学校長になった納富介次郎もバックアップ、そして近衛よりもいち早く南京で布教活動を始めていた常福寺の北方心泉和尚が、近衛から寺院での教室借用の相談にのり、石川県からの学生を多く送ると約束、またすでに南京で親しくなっていた劉坤一に近衛をスムーズに引き合わせ、近衛の南京同文書院の実現も可能にしたのである。





教育活動の支援

愛知大学地域連携研究機構・同総合郷土研究所公開講演会

岩原剛「徳国の古墳文化—馬越火塚古墳と寺西1号墳からわかること—」

愛知大学総合郷土研究所
所長 神谷 智

いまから15年程前に、本学卒業生で愛知大学総合郷土研究所(郷土研)研究員でもある豊川市在住の荒木亮子(郷土研臨時職員)・栢原将人(豊川市桜ヶ丘ミュージアム学芸員)の両氏が、「郷土研倉庫に未整理の考古遺物がある」と、当時の本学教授・故玉井力氏(本学名誉教授)に伝えてきました。その後これらは過去に本学がいくつか発掘調査した際の遺物であるとわかり、河原田・川田原遺跡については三氏を中心に、元本学講師であった井口善晴氏(元奈良国立博物館学芸員、前高浜市やきものの里かわら美術館館長)のご協力も得て、発掘報告と研究成果がまとめられました。

別に寺西1号墳出土の鉄剣等についても、高度な科学的分析の必要もあって、玉井氏の後任である廣瀬憲雄本学教授の尽力で、元興寺研究所(奈良市)や郷土研研究員である岩原剛氏(豊橋市文化財センター長)らの協力を得て、分析結果と研究成果がまとめられ、2022年3月にはこれに関するシンポジウムが豊橋市公会堂で開催され、約200名の参加を得ました。

この寺西1号墳にくわえて、豊橋市文化財センターが長年発掘研究されてきた馬越長火塚(まこしながひづか)古墳などの研究成果を、豊橋市内だけではなく東三河に広げて郷土研ブックレット『東三河の古墳—1,600基の古墳はどう築かれたのか—』として岩原氏がまとめられ、この刊行記念も兼ね、本公演会を開催する運びとなりました。報告は、愛知県下約3,000基の古墳のうち東三河がその半数を占め、それは古墳時代中期以降が中心で、この時期から東三河に有力な王が出現したというもので、また馬越長火塚古墳は穂の国造の墓で、寺西1号墳は穂の国造に仕えた武人の墓の可能性があるというものでした。報告後約100名の参加者のなかからも、活発な質問意見が出されました。

以上、今回の講演会は地域研究者を中心に、本学の卒業生や旧教員などの連携・協力による地域研究の一つの成果であると思っております。最後に今回の講演会に助成をいただきました愛知大学教育研究支援財団に、心からお礼と感謝を厚く申し上げます。



愛知大学硬式野球部 1部復帰までの軌跡

愛知大学硬式野球部監督
八田 剛

2022年10月24日(月)パロマ瑞穂野球場で入替戦の第3戦が行われ、6-2で勝利し4年(8季)ぶりに1部復帰を果たしました。歓喜に沸く中、この4年間の苦労が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、しばらく放心状態だったことを思い出します。

2部降格の4年前、チームの立て直しを図り軌道に乗ってきたと感じた矢先に、コロナ禍と不祥事のダブルパンチ…

勿論、初めての事ばかりで何から手を付けて良いやら、苦悶の日々を過ごしていました。しかし、大学執行部の方々を始め多くの方々の励ましやご尽力により、気持ちも晴れ徐々にモチベーションを上げることができました。選手たちも気持ちを切り替えて、前向きに練習をしていましたので、何か起爆剤が必要だと考えていました。

すると、安田悠馬(現東北楽天ゴールデンイーグルス)が注目を浴び始め、マスコミやスカウト陣が多数グラウンドや球場に来ていただけるようになり、本人だけでなくチーム全体が盛り上がり良い方向に向かっていました。

残念ながら、コロナ禍の状況で入替戦が中止となっていました、翌年に繋がる素晴らしいチーム作りができました。

2022年度のチームは、昨年の勢いに乗ってスタートはしたものの、春季リーグ戦直前でチーム内に新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生し、散々な結果に終わってしまいました。そこで、夏に3年ぶりの北海道キャンプを行い徹底した身体作りと技術力アップを図りました。また、関西遠征を実施するなど実践力もアップして秋季リーグ戦に挑みました。大型投手の中井大和(現徳島インディゴソックス)を中心に元気かつチームワークの良さで順調に勝ち進み、1部復帰に繋がりました。

2023年度は、これまでと違い苦戦を強いられることが多いと思いますが、10年ぶりのリーグ優勝をして全国大会出場を果たすべく、更なる精進を図って参りますのでより一層のご支援、ご声援のほどよろしくお願いいたします。





教育活動の支援

堀場勇夫先生ご講演の紹介

愛知大学経済学部教授
國崎 稔

2022年12月16日に本学名古屋校舎にて、堀場勇夫先生による「人口減少・高齢化と地方財政」と題した講演会が実施されました。堀場先生は、青山学院大学名誉教授であり、2022年2月まで地方財政審議会会長を務められました。堀場先生は地方財政学を専門に研究活動が続けられています。また地方財政に関する政策実務にも長年貢献されてきました。このような先生の実績と見識を本学学生および一般社会人向けに広く紹介するために、ご講演を依頼しました。

講演内容は以下の通りです。まず人口が30%以上減少した夕張市を例に挙げて、地域サービスがいかに低下し、そしてその結果人口流出に拍車をかけた経緯が紹介されました。夕張市は2007年の財政破綻後、若い世代が地域を離れ、高齢者だけが残ることでコミュニティが崩壊するなど、負のスパイラルに陥りました。しかしその財政再建のために、国からの多くの支援があったことも紹介されました。この夕張市の人口減少と財政再建の過程は、50年後の我が国の姿であり、各地方自治体が直面する課題でもあるといえます。

現在日本の地方自治体は国からの移転、特に地方交付税および国庫支出金によって、財源が下支えされています。講演の後半は、この日本の地方財政制度、特に地方交付税制度を詳細に解説していただき、地方交付税の地域サービスへの財源保障機能と歴史的意義が示されました。さらに高齢化の進展による財政支出圧力と人口減少による財源不足という地方財政制度の課題が提示されました。

まず高齢化の進展は、地方財政支出の膨張要因であり、人口減少は税収の減少を意味しています。このような地方自治体の厳しい将来に対して、これまでの地域サービスの配分を物質的投資から人的・社会関連投資に変換し、すべての地域で保証されてきた地域サービスを質と量の両面から見直すことで持続可能な地方財政制度を再検討し、そのための国民的議論が必要であることが指摘されました。

以上のように、この講演会は、参加した本学学生および一般社会人の参加者にとって、現在と将来の地方財政問題を知るとともに、今後の自らの身近な問題であると認識する機会となりました。

また講演会には愛知県内の地方自治体職員の方々も参加いただき、講演会後に開催した懇談会でも活発な意見交換がなされたことを付記します。



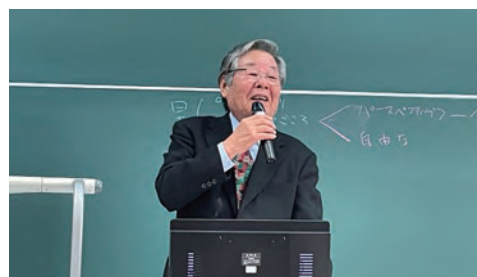
フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受勲記念

愛知大学名誉博士 第4回 平松礼二展 〜アイチ、モネ、そして世界へ！

愛知大学広報課長
岩田 正人

2022年11月12日から19日まで、合計8日間に渡り、「第4回愛知大学名誉博士平松礼二展 〜アイチ、モネ、そして世界へ！」を豊橋キャンパス大学記念館にて開催いたしました。今回はフランス政府芸術文化勲章シュヴァリエの受勲を記念した展覧会でもありました。本展覧会については、新型コロナウイルス感染症の影響により、2019年11月の開催を最後に、長らく中止せざるを得ない状況にあったため、私としては、感染防止対策をすることで、何とでも開催させたい、成功させたいという思いが強くありました。展覧会初日には、平松礼二先生が来場され、『「睡蓮交響曲」-90Mの大屏風完成記録-』と題して、講演会が開催され、コロナ禍にもかかわらず、定員100名が瞬く間に満席となりました。展示会場では、第1展示室から第7展示室まで、7つのテーマを切り口に、見応えのある作品が多数展示され、見学者は迫力ある展示に圧倒されていたように思います。

また、中には、絵の前で立ち止まり、深く魅入る方も多々いらっしゃり、3年ぶりに、無事開催できたことを心より嬉しく思いました。見学者の方は、愛知県にとどまらず、岐阜・三重・静岡等、遠方よりお越しいただいた方も多数いらっしゃいました。見学者からは、「平松先生の作品を愛知で見るとは難しいため、非常にうれしい」、「何度見てもすばらしい。とても素敵で、感動の連続でした」など感嘆の言葉が多々聞かれました。結果として、8日間を通して、入館者数は合計1,169名(1日当たり平均146名)と大盛況のうちに終了いたしました。平松礼二先生は、ジャポニスム印象派の巨匠であり、21世紀を代表する日本画家です。このような偉大な画家が、本学の卒業生であることを、私は誇りに思います。また、今回3年ぶりに開催し、連日大勢の来場者であふれかえったことを受けて、この先も、ずっと開催し続けたいと強く実感しました。





教育活動の支援

「奨励賞」授与式

2023年3月4日
愛知大学車道キャンパスで実施



加藤理事長あいさつ

2019年度から3年間は新型コロナウイルス感染症のまん延により、式が開催できず賞状と記念品の郵送のみとなり栄えある賞を受賞された皆様の讃える機会をなくしておりましたが、2022年度はコンベンションホールにおいて開催することができました。社会・文化・学術・芸術・スポーツ・社会貢献などの分野において活躍し、成果をおさめた個人及び団体に対し、その栄誉を称え、一層の励みとすることを目的に顕彰を実施しました。

後援会最優秀奨励賞受賞

経営学部1年(2022年度時)
菅谷 佑大

この度は「後援会奨励賞最優秀奨励賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。愛知大学に入学して1年が経とうとしておりますが、コロナ禍で制限が多い環境の中で、部活にも勉強にも精一杯取り組める環境を整えていただき大変ありがたく思っております。柔道部の活動では、監督やコーチ、先輩方や同級生に恵まれ、厳しくも楽しく稽古やトレーニングに励むことができました。高校時代は、個人戦で結果を残すことが出来ず悔しい思いをしてきましたが、大学では団体戦・個人戦共に東海地区の代表として多くの全国大会に出場することができました。

9月に開催された全日本ジュニア柔道体重別選手権大会では5位に入賞し、続く10月に開催された全日本学生柔道体重別選手権大会では上位入賞を果たしました。その結果、念願の一つとしていた講道館杯全日本柔道体重別選手権大会に出場することができました。この大会は、オリンピック日本代表選手をはじめ、社会人(実業団)や警察、刑務官など、それぞれのカテゴリーで勝ち上がった強豪選手のみが出場できる国内屈指の大会です。目標としてきた本大会では、初戦で警察代表の選手に負けてしまいましたが、大きな実力の差は無く、これからの努力次第で十分に戦える手応えを感じました。

来年度以降の目標としては、全日本ジュニア柔道体重別選手権大会・全日本学生柔道体重別選手権大会で表彰台に上がり、講道館杯柔道体重別選手権大会で入賞することです。その先の強化選手指定を目指していきます。また、勉強や日常生活においても努力と自己研鑽を忘れず、多くの方から応援して頂けるよう人としても成長していきたいと思っております。

引き続きご声援のほど、よろしくお願いいたします。この度は本当にありがとうございました。



準硬式野球部のマネージャーとして

経営学部4年(2022年度時)
近藤 みのり

この度は、奨励賞を授与していただき、誠にありがとうございます。

私は約3年半、準硬式野球部のマネージャーとして活動し、特に広報活動に力を入れて参りました。入部当初、ほとんど野球のことを知らなかった私は、ルールやスコアの書き方を覚えることからスタートしました。練習に参加したり、試合でベンチに入ったりするうちに、愛知大学準硬式野球部のことが大好きになっていきました。そんな準硬式野球部の魅力を多くの方に知ってもらいたいと思い、SNSの更新に力を入れるようになりました。練習の様子や動画等を高頻度で投稿し、雰囲気が伝わるように工夫しました。Instagramのリール動画の再生回数は1万回を超えているものもあります。また、愛知大学だけに留まらず、全国大会のSNSの更新も行い、大学準硬式野球の認知度向上にも取り組みました。そんな私の活動の集大成となったのが、甲子園球場で開催された大会の運営です。私はプロジェクトチームのリーダーを務めました。甲子園球場で大会を行うことは、大学準硬式野球としては初めてのことです。何度もミーティングを重ね、準備し、迎えた大会当日、降りしきる雨の中、大会の中止が告げられました。一瞬、時が止まったように感じました。ただただ、悔しかったです。セレモニーだけが行われ、私も学生代表として挨拶をさせていただきました。その時の、甲子園球場全体のあの一体感は生涯忘れることができません。選手、スタッフ、そしてスタンドまで同じ時間、同じ想いを共有しているように感じました。中止という結果にはなってしまいましたが、大学準硬式野球にとって意味のある1日になったと確信しています。

私の大学生活は、準硬式野球部なしでは語ることはできません。本当に充実した4年間でした。多くの人と出会い、たくさんの貴重な経験をさせていただき、人として成長することができたと思います。4月からは社会人になります。不安も少しありますが、新生活への期待で胸がいっぱいです。4年間で学んだことを活かし、今後も成長し続けたいと思います。最後になりますが、関わってくださった全ての方々に、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。





教育活動の支援

第38回2022年ACAP論文賞

「消費者問題に関するわたしの提言」での入選 [同窓会奨励賞優秀賞]

法学部3年(2022年度時)
後藤 那月

この度は、「同窓会奨励賞優秀賞」を授与いただき、誠にありがとうございます。

私は、日常生活をめぐる法律問題をテーマとしている上杉ゼミに所属しています。ACAP主催の第38回「私の提言」への応募もゼミ活動の一環として行ったものです。入選に伴い、上杉先生にサポートしていただきました。ありがとうございました。消費者トラブルについて、かねてより興味があったこと、また、2022年4月1日に改正民法が施行され、成年年齢が引き下げられたことから、題材として「消費者トラブルと若者」を選びました。どのようにすれば、消費者トラブルに巻き込まれてしまった時の危険性を、若者に対して伝えられるのか、という部分に焦点を当て、楽しみながら学習を行うことができる一形態としてVR技術の取り入れを提案しました。講評では、その部分も評価いただけて嬉しかったです。

上杉ゼミでは、主に判例報告を行なっています。春学期には勝手がわからないことも多かったのですが、報告の回数を重ねていくと秋学期には、事案の概要を理解しやすくするためにパワーポイントを導入する工夫もできるようになりました。報告は、判例毎の論点に対して、様々な文献を基に自分の見解を導きます。さらに、報告は少人数のグループで協力して行うので、意見を交換して見解の精度を高めていくこともできます。報告当日も新たな見解を得ることができ、これらを踏まえてレポートにまとめることで、知らなかった内容であっても追及し理解できたと、この一年を通じて実感しました。来年度では、ゼミ生の判例報告で挙げた論点にも発言できるように頑張りたいと思います。この度は本当にありがとうございました。



名古屋マーケティング・インカレ優勝

経営学部
為廣ゼミナール「塩、ひとつまみ」

このたびは同窓会優秀賞を授与していただき、誠にありがとうございました。

私たちは「メイクをする可能性がある男性の特徴とは」というテーマで1年間研究しました。私がメイクに興味をもったきっかけが、たまたま見た芸能人のメイク動画だったことから研究が始まりました。メイクに関心が無くても、きっかけがあれば興味を持つ人がいるはずで、そのような人を見つけることが企業の効果的なマーケティングに必要なだと考えたからです(川畑優悟)。

最初はメイクに興味はありませんでしたが、研究を通してメイクの魅力を知り、実際にメイクを始めました。「メイクに興味がない人」が研究できるのか不安でしたが、様々な観点から考えることが重要だとわかり、積極的に意見を述べるできるようになりました(小澤拓也)。

アンケートを計画する際に、結論を意識しすぎたために意見が衝突し、研究が停滞することがありました。リサーチの講義を思い出してプレアンケートを実施して質問票を改善し、本調査では有効なデータを得ることができました。講義で学んだことを実際の問題解決に活かすという貴重な経験ができました(蔭山菜美)。

初めてのグループ研究でしたが、少しでも違和感があれば全員が納得するまで話し合いを行い解決しました。意見の相違も多々ありましたが、遠慮せずに意見を出し合えるメンバーに恵まれたことが良い結果につながったと思っています(森田くるみ)。

コロナ禍で様々な活動が制限される中、濃密なグループ研究ができたこと、またその結果が評価されたことは本当に幸運なことだと思います。名古屋マーケティング・インカレを運営してくださった教員・学生の皆様、ゼミの仲間には心より感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



【後援会奨励賞】●スポーツの部(団体)・優秀奨励賞 5団体・奨励賞 9団体 ●スポーツの部(個人)・最優秀奨励賞(柔道部・大藪太郎氏、菅谷佑太氏) 2名・優秀奨励賞 19名・奨励賞 27名 ●マネージャーの部・奨励賞 8名 ●学術文化の部(団体)・優秀奨励賞 1団体(軽音楽部)

【同窓会奨励賞】●(個人)・優秀賞 安楽雅志氏(昭和レトロ風イラストレーター)、近藤みのり氏(準硬式野球部マネージャーとして東海地区、全国で活躍)、後藤那月氏(第38回ACAP論文賞「消費者問題に関する私の提言」での入選)、鈴木亨尚氏(母校の国府高校野球部OB会長としてチームを牽引し、マスターズ甲子園出場を2度(2019・2022年)も牽引)・功労賞 飯田正明氏(同窓会活動「横浜ことはじめを巡る探訪」を通して会員の親睦・研鑽等に貢献)、梶田健斗氏(準硬式野球部主将としても活躍)、篠原俊則氏(「朝日歌壇」300首を超える入選～短歌を通じて地域社会に貢献～)●(団体)・最優秀賞 柔道部(第69回東海学生夏季優勝大会 優勝)・優秀賞 為廣ゼミナール「塩、ひとつまみ」(名古屋マーケティング・インカレ優勝)・功労賞 為廣ゼミナール「リライト」(名古屋マーケティング・インカレ準優勝)

【クラブ愛知賞(社会貢献の部)】●(団体)戸田ゼミナール(軽トラ市の普及による地方商店街の活性化活動)

【同窓会資格試験合格者奨励賞】●(司法試験)村田大和氏、川喜田桃子氏 ●(公認会計士)横山竜起氏 ●(税理士試験)後藤あゆみ氏、西村悠平氏



教育活動の支援

「奨学金」授与式

2022年12月3日 愛知大学名古屋キャンパスで実施

名古屋キャンパス講義棟4階L407教室において、2022年度奨学金授与式を開催しました。学生が経済的理由で勉学をあきらめることなく、希望ある未来を目指してもらうことを願い、合計69名の学生に奨学金を授与しました。式では、加藤満憲理事長、武山卓史後援会会長の挨拶、川井伸一学長から激励の言葉をいただきました。また、受賞した学生を代表して、各分野の3名から感謝の言葉や抱負が語られました。

奨学金給付実績

一般給付奨学金 34名 法科大学院特別奨学金 3名
法科大学院入学時給付奨学金 2名 知を愛する奨学金 5名
後援会学業奨励金 22名
後援会私費外国人留学生給付奨学金 3名

法科大学院特別奨学生

法科大学院3年(2022年度時)
伊藤 大介

本日は、このような場で抱負を述べる機会を与えていただき、とてもうれしく思います。外見が老けていることから一見して分かるかと思いますが、私は、社会人を経験しておりますので、他の方とは異なる経歴で法科大学院へ入学しておりますし法学部出身ですらありません。大学時代、私は企業活動を経営の観点から支援をしたいと考え、大学卒業後は、銀行に入社しました。厳しい就職活動を勝ち抜き、志高く入社式を迎えたことを今でも覚えております。主に法人融資を担当しており、企業の活動を経営の観点から支援したいという気持ちで、融資提案等を行っていましたが、それは、銀行の収益につながる活動になるとは決していえず、上司からも叱責され、融資案件も止められるなどし、自身の思い描いた銀行員像とは大きくかけ離れた毎日を過ごしていました。そのような日々を過ごす中で、親戚が経営する会社が、バブル時代に流行った銀行主導でのゴルフ会員権との抱き合わせ融資が焦げ付き、住んでいる家まで差押えを受けそうになるという事件が発生しました。私は銀行員という立場から、担当の弁護士さんと協力し、なんとか和解をし、日常生活に支障がないようにすることができました。この事件もあり、企業を経営の面から支援したいという私の理想は達成することはできず、また、人を直接助けることができるのは、弁護士なのではないかという気持ちが芽生えていきました。



そして、ある日、スマートフォンでインターネットを検索していると司法試験予備校の「司法試験は最短で二年で合格できる」との言葉を目にして、説明会に参加しました。そのときの予備校講師から、二年あれば十分に合格できますなどという甘い言葉を何度も言われ、自分の学生時代の成績や勉強が好きか否かなどは全く顧みず、銀行を辞め、司法試験への途を目指すことをいとも簡単に決意してしまいました。当然、一人で勉強するには限界があり、途方に暮れているところ、偶然に参加した愛知大学法科大学院の説明会において、教員が熱心で少人数教育であり、学生・教員間の距離が近く、他の法科大学院と比べ教育熱心であり、なによりも合格率が非常に高いという甘い言葉を言われろくに検討もせず、愛知大学法科大学院に入学することをまたもや安易に決意してしまいました。

実際に愛知大学法科大学院に入学し、毎日答案を何通も書き、添削を受け、訂正の赤い文字だらけになり、何度も挫折しそうになりました。ただ、先生方は非常に熱心な方ばかりで、法律答案の書き方など全く分からない私に、基礎の基礎から熱心に指導していただくことができました。司法試験は、全部で8つの法律科目を学ばなければならず、時にはどれほど勉強しても、これは一生分から知らないだろうなと思う科目も存在しましたが、その科目の先生からは長い期間をかけ一から指導していただくことができ、今では他の人と遜色のない程の答案を書くことができました。

このような私ですら、今日このような場で奨学金をいただくことができるレベルにまで成長することができたのは、自分の努力だけではなく、先生方の手厚く熱心な指導によるものでもあり、今では愛知大学法科大学院で司法試験合格を目指して本当によかったと思ひ日々勉学に励んでおります。日々同じ机で同じことを何度も繰り返すことは、退屈で非常に大変ですが、その先に自らが望む法律家という未来が待っているのです。日々の弛まぬ努力でこの困難に打ち勝ちたいと思います。

そして、これまでの社会人経験等も活かしつつ、他人間の法律トラブルを解決し、毎日を不安に思う人の心からの支えになることができるような法律家を目指し、これからも精進していきたいと思います。

と、これまで抱負を述べさせていただきましたが、司法試験に合格しなければすべては元の本阿弥となってしまいます。司法試験まで、今日で残り221日ですので、これからもより一層勉学に励んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。



教育活動の支援

後援会学業奨励生

国際コミュニケーション学部3年(2022年度時)
石川 実果

この度は、「後援会学業奨励生」に御採用いただき誠にありがとうございます。採用通知が届いた際には驚きの気持ちが一番大きかったですが、自身の勉学に対する取り組みをこのような形で評価していただけたことをとても嬉しく感じると共に、これからも頑張っていこうという励みになりました。私は2020年の4月に愛知大学に入学しましたが、この年というのは、新型コロナウイルスが流行し始めた年です。入学式も中止となり、また全ての授業がオンラインというイレギュラーな形から私の大学生活は始まりました。当時の私は慣れない形での大学生活に戸惑っていたことが多かったと思います。しかし、今では対面授業も増え、私はほとんどの授業を対面という形で受けることが出来ています。1年生、2年生の頃にオンライン授業を多く経験して今思うことは、大学に来て先生の授業を対面で受けられるということや友達やクラスメイトと向かい合って話すことができるということは当たり前ではないということです。また、どのような状況の中でも、オンライン授業という対応を含めその時の状況に応じた最大限の勉強環境を私達生徒に提供し続けて下さっている愛知大学には、感謝しなければならぬと感じています。



私は今後の大学生活の目標として、後悔のない大学生活を送りたいと思っています。早いもので気が付けばもう12月、3年生としての大学生活も終わりが近づいています。そして、次の春からは4年生、大学生としての最後の1年が始まります。これから本格化していく自身の人生の分岐点となるであろう就職活動についてはもちろんのこと、現在力を入れて取り組んでいるTOEICを含む資格の取得など、全てのことに於いて自分自身が納得した良い形で終えられるように努めていきます。そして、後悔なくやり残したこともなく、自信をもって全てやりきったと胸を張って卒業できるよう最後の1年を過ごしていきます。

後援会私費外国人留学生給付奨学生

現代中国学部4年(2022年度時)
張 嘉文

この度は、愛知大学教育研究会支援財団「後援会私費外国人留学生給付奨学金」に採用いただき、誠にありがとうございます。

奨学金を頂けることにとても感謝しています。新型コロナウイルスの影響を大きく受けてしまい、経済的にとても厳しかったのですが、奨学金を給付していただけたことで、アルバイトの回数も減らすことができ、安心して学業に励むことができるようになりました。また、両親の経済的負担を少しでも軽減できたので、心から感謝しています。奨学金に採用していただいたことにより、お金にも、時間にも余裕ができたので、様々なことに挑戦することができました。



私は何事にも決断することが苦手な性格でした。子供の頃は単なる好奇心で決めていたことが、成長するにつれて私に合うかどうか、私にできるかどうかを考えるようになりました。しかし、いくら見えない将来のことを不安に思ったところで、一歩踏み出してみなければわからないと考えるようになりました。もしそうなら、「まず自分の今の気持ちでやりましょう」そう思ったことがきっかけで、私の留学生活が始まりました。もちろん多くの困難に遭遇しましたが、今思えば乗り越えられないと思っていた困難も、最後には打ち勝っていました。大学4年間、異なる授業を学ぶことで、自分の視野を広げると同時に、物事の見方も大きく変化しました。どの選択肢を選ぶよりも、決断した後の行動が大切なのだと思い知らされ、これからは目の前のことに全力で取り組んでいこうと考えています。現在の中心は卒業論文を完成させることであり、先生の指導のもとで論文の執筆も順調に進んでいます。提出する際には、自分でも納得できる論文を完成させたいです。

あと少しで卒業しますが、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業も多く、学校にいる時間は多くありませんでした。今年度で最後になる学生生活を悔いの残らぬよう、引き続き勉学に励みつつ、友人との時間も大切に過ごしたいと考えております。また、私はこれからも努力を続け、社会で活躍する人材になることが恩返しになると考えています。最後に、ご支援いただいた全ての方に重ねてお礼を申し上げます。

知のミーティング、海外研究実習助成、教育活動助成、キャリア教育事業助成金などの事業

講演会開催等への助成、学生が海外を訪問し社会の実情を研究する海外フィールドワークや海外インターンシップ、学生の部活動における各種競技大会へ参加する経費等の助成、学生のキャリア育成にかかる事業支援などを実施しています。

◆ 同窓会会長・後援会会長ごあいさつ ◆

愛知大学 同窓会会長 八木 好郎

愛知大学は戦後間もない1946年に設立され、今年で創立77年となります。

一方、愛知大学同窓会は1952年、第5回の卒業生と短期大学の第1回卒業生が約1千人に達したとき、卒業生の要望と協力により愛知大学同窓会が設立されました。

昨年、愛知大学同窓会は設立70周年を迎えたことから、同年の11月6日にコロナ禍のなかではありましたが、愛知大学名古屋校舎においてイベントを開催、祝賀会は名古屋マリオットアソシアホテルを会場として、720名を超える多くの方にご参加頂き「愛知大学同窓会70周年全国総会・祝賀会」を盛大に開催することができました。このように、愛知大学同窓会は、設立70周年を節目として新たなスタートをきりました。愛知大学の卒業生は15万人を超え、また、現在の会員数は10万人を超える、全国でも屈指の歴史と伝統がある同窓会として、全国の各地で支部活動、部会活動に積極的に取り組んでおります。

同窓会が設立された13年後の1965年に教育研究の充実発展に寄与することを目的に、財団法人愛知大学同友会が設立されましたが、2012年に、より地域社会に貢献する人材の育成を重視した、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団が設立されました。早いもので、設立後10年が経過いたしました。日本国内の新型コロナウイルス感染症の第1例は、2020年1月に始まり、既に3年が経過いたしました。在校生の皆さんは、教育支持者の収入の減少、また、アルバイトの減少等により、ご自身の収入も減少するなど、大変厳しい生活環境であったと思われます。同窓会としては、この間、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団（以下、「教育研究支援財団」）を通じて、愛知大学、在校生、同窓生の皆様に積極的にご支援をしてきました。そして、同窓会の第3次活動基本方針の下、基本分野である1. 会員相互の親睦、2. 愛知大学の隆昌発展への寄与、3. 愛知大学第5次基本構想への対応を主眼に、各種施策を進めております。具体的には、同窓会は各支部と部会の組織を基本に各種活動をしてありますが、より一層「絆」を深め、教育研究支援財団の「キャリア教育事業助成金」、愛知大学のキャリア・アドバイザー制度「Ai-CONEX」（アイ・コネクス）への支援として、社会人として経験豊富で、地方公共団体、各種企業で活躍、若しくはリタイアした方からのアドバイス、また、就職活動をされる在校生の方への積極的な支援をしていきます。

今後も、同窓会は教育研究支援財団と一体となり、在校生、愛知大学、同窓生を支えていきたいと考えております。

profile

八木 好郎

岐阜県瑞穂市在住
昭和47年3月 愛知大学
法経学部 経営学科卒業
昭和47年4月 岐阜信用金庫入庫
平成14年6月 岐阜信用金庫理事に就任
その後、常務理事に就任
専務理事に就任、副理事長に就任
平成27年6月 副理事長を退任し退職
令和2年4月 医療法人社団幸紀会 統括事務局長に就任
令和3年12月 ジャパンパブリックプライベートパートナー機構(株)
代表取締役就任
令和4年6月 愛知大学同窓会 会長に就任
令和4年6月 (公財)愛知大学教育研究支援財団理事に就任
令和4年10月 学校法人愛知大学理事に就任



愛知大学 後援会会長 武山 卓史

日頃から公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」の活動に多大なるご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。また、後援会活動に対しても様々なご支援をいただき、ありがとうございます。あらためて厚く御礼申し上げます。

愛知大学後援会は1953年(昭和28年)に発足し、以来、在学生の父母である会員との連絡を密にし、相互の理解と協力を深め、愛知大学学則において大学全体の目的を「高い教養と専門的職能教育を施し、ひろく国際的視野を持って人類社会の発展に貢献しうる人材を養成すること」に資するために、大学の教育向上と学生の福祉増進に資するとの本会の設立目的を常に念頭におき各種事業を実施しております。

2012年(平成24年)に設立された公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」は後援会と同窓会がそれぞれに行ってきた奨学金寄付事業などを一本化し、愛知大学及び愛知大学生、愛知大学生OBの支援を行っています。現在は奨学金給付に留まらず、学術研究補助、課外活動支援、キャリア形成支援など多岐に亘って支援を展開しています。このような積極的な活動を推進できますのも、趣旨にご理解、ご賛同をいただいた後援会、同窓会ははじめ、広く一般企業、個人の方からのご厚情の賜物です。

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の取り扱いが5類に引き下げられたことから、正に時代はウィズコロナの社会へ変化したといえます。新型コロナによって生活様式だけではなく仕事を取り巻く環境も大きく変わったといえますが、私たちはこの変化に対応して今後の日本経済を牽引し社会を担う若者を育てていかなければなりません。大学の掲げる「自立・自走する力」を養わなければなりません。大学内で学ぶべきことは学内での授業だけではなく、所属ゼミでの課題での研究、クラブ・サークル活動、ボランティア活動など目を外に向け吸収すべきことは数多く存在します。グローバル化が進む中、ひとつでも多くの経験を重ねることが可能性を広げ、未来への第一歩となります。

愛知大学には約9,800名の学生が在学し、約15万人余の同窓生が社会で活躍しています。このネットワークが今後拡大することにより、現役生と卒業生との繋がりも密になり、学内、学外での活動の場はさらに広がります。

今後、財団が果たすべき役割も増え、支援の場も広がります。私も後援会長として、また同窓生として少しでも役立てる活動をしていきます。同窓会の皆様にはこれからも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

profile

武山 卓史

平成5年3月 南山大学法学部法学科 卒業
平成7年3月 愛知大学大学院法学研究科
修士課程 修了
平成8年3月 愛知大学大学院経営学研究科
修士課程 修了
平成11年5月 税理士登録、
以後武山卓史税理士事務所
令和3年6月 後援会長に就任
令和3年6月 (公財)愛知大学教育研究支援財団
理事に就任



寄附金名簿

※(順不同・敬称略)

◆法人

愛知大学後援会
愛知大学同窓会
愛知リーガルクリニック法律事務所
株式会社 アシスト
宇都宮工業株式会社
株式会社うぼん
NTP名古屋トヨペット株式会社
株式会社えびせんべいの里
株式会社 ガード・リサーチ
木村産業有限会社
株式会社共立メンテナンス
CANホールディングス株式会社
近畿日本ツーリスト株式会社
株式会社クイックス
ジャニス工業株式会社
セイコーコンサルタント株式会社
株式会社大学通信
有限会社坪井令夫商店
西濃運輸株式会社
デュプロ販売株式会社
税理士法人 東海浜松会計事務所
トーテックフロンティア株式会社
トクデンコスモ株式会社
トヨタカローラ名古屋株式会社
日本音楽出版株式会社
(株)ナショナルメンテナンス
ネットトヨタ東海株式会社
株式会社 日笠会計
藤岡倉庫株式会社
有限会社 フジパッケージ
株式会社フューチャーイン

公益財団法人 古川知足会
株式会社 ベストライフ
株式会社 マルホ
明治電機工業株式会社
株式会社 名大社
ユーティーケー工業株式会社
株式会社 Re・lation

◆個人

青野 吉伸
足立 光則
荒木 仁子
有森 茂生
石川 光男
石澤 務
伊藤 広済
稲垣 信行
稲田 正俊
岩田 喜久
内山 隆司
遠藤 精基
大江 恒晴
岡村 幹吉
尾関 種雄
加藤 孝雄
加藤 春雄
加藤 満憲
岸田 充広
國島 芳明
熊谷 友佳理
栗原 裕
甲村 洋子

小林 進之輔
酒井 強次
酒井 美代子
佐藤 隆子
下和田 恵男
庄田 元久
菅野 隆
菅原 宜彦
杉本 みさ紀
鈴木 孝一
鈴木 智
高木 守
高間 益雄
高野 史枝
高橋 俊一
竹島 良祐
竹島 まこと
武田 秀則
多田 譲
土井 義昭
唐 啓山
鳥越 剛
中江 正弘
中島 寛司
中野 貴文
那須 國宏
西川 米子
橋本 正洋
土師 幸夫
長谷川 勲
長谷川 信義
林 一義

林 貞男
林 昇平
林 行孝
速水利行
日笠 羽司名
久里 和英
平井 治彦
廣重 美和子
福田 豊
藤井 千恵子
藤井 明雄
藤岡 勢理
藤田 拓也
二村 友佳子
堀田 正二
堀田 久富
堀木 ヒロミ
松井 淳子
松下 真由美
松野 博美
森 繁美
森 善徳
八木 好郎
安井 健治
安井 博子
山崎 恵子
山田 功
山本 薫
湯山 義則
吉井 忠
脇水 達生
和田 信敏

皆様からお寄せいただいた温かいご支援に心よりお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

※本財団に寄附した年会費及び寄附金は、法人税・所得税の優遇の対象となります。(詳しくは、税務署へお問い合わせください)

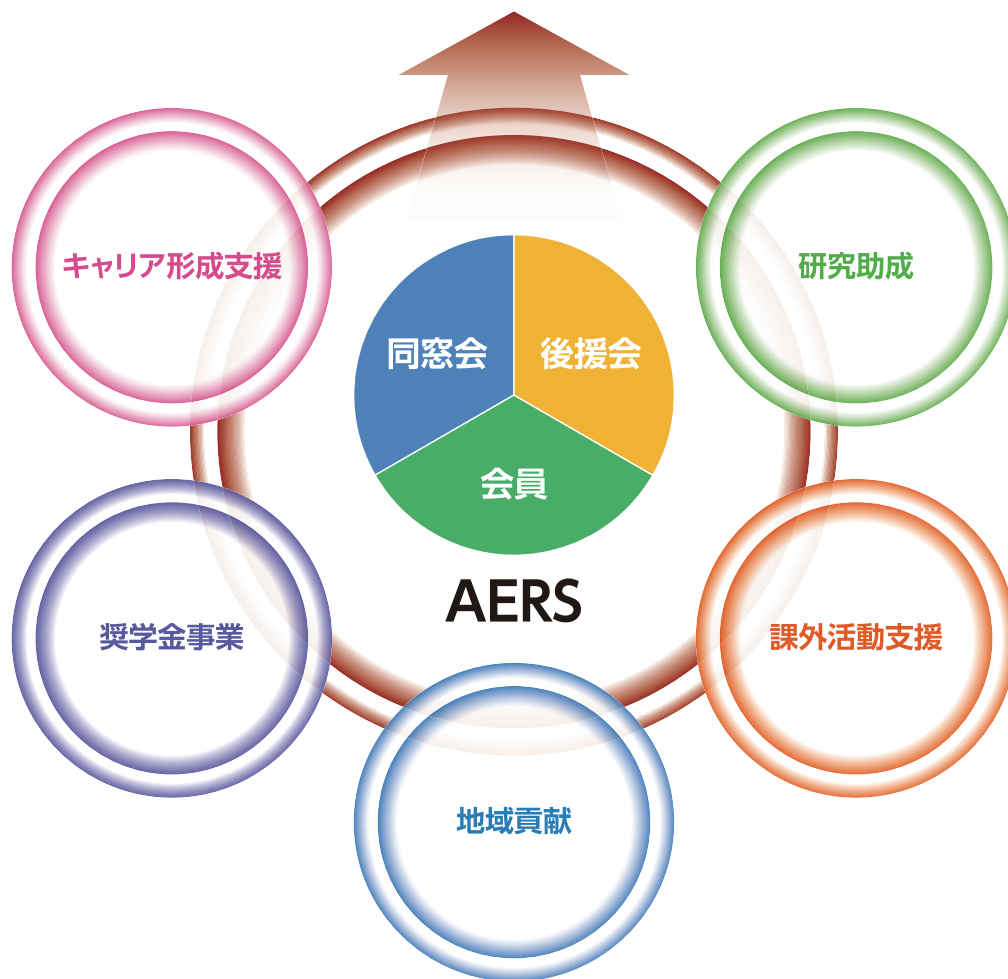
2012年11月、より地域社会に貢献する人材の育成を重視した財団として、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」を設立いたしました。本財団は、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実、不特定多数の利益の増進に寄与するための事業を実施しています。ひとりでも多くの研究者や学生、ひとつでも多くの事業に助成が活かされることを願って、幅広く応募の機会を開いています。これらの事業は、同窓会費・後援会費を始め、広く一般企業・個人の皆様の会費・寄附を貴重な原資としております。今後とも活動にご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

■財団の基本情報

名称	公益財団法人愛知大学教育研究支援財団
設立日	1965(昭和40)年9月7日(財団法人 愛知大学同友会)
移行日	2012(平成24)年11月1日
代表者	理事長 加藤満憲
事務局	〒461-8641 名古屋市東区筒井2-10-31
電話番号	(052)937-8156
FAX	(052)937-8157
e-mail	kouyu@aichi-u.ac.jp
ホームページ	http://www.aichi-u.ac.jp/aers

社会で活躍できる優れた人材の育成

愛知大学



知で生きる人へ。

公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION